伊香保志 巻三

伊香保志下巻目録

○舊事
村民八氏の事
木暮氏古文書
○附録諸書抄出
萬葉伊加保歌并解
北國紀行
東路の裏
伊香保のみちゆきぶり
赤城紀行
伊加保の古歌
宗祇終焉記
山吹日記
尹香保道の記
白山記

曙文庫

尺蠖樓藏書

遊船尾伊香保記
更衣日記
温泉序記

伊香保志下巻

東都　秋萍居士　輯

舊事

土人傳へ云人皇十一代垂仁天皇二年伊香保ノ温泉涌出ると然れども上古の事を固より定めがたし伊加保の地名の書に見えたるは萬葉集を始めとし夫より古へ集以下代々の歌集に伊加保嶺行加保の沼と詠み又延喜式國史等に伊賀保の神と擧げたり當地をかく古くより伊香保と稱して群馬郡に屬す嘗他へ合村分郷せしを他に亦地名中世に桃井の郷伊香保の荘の稱ありしと云へど分西もいと廣かりしかや又その名みを伊香保の神領あり足利氏の

子上杉氏山の内上杉 當國の守護 にして二井城に居て鎌倉の管領と
為りその長臣長尾氏を守護代として白井城に居しむその頃この
宅の地を長尾氏に屬し天正年中の事なり後に原の北條氏に屬し天正
十八年徳川氏關東に移封し後井伊氏初箕輪に城し後の領となり寛
永九年より徳川家直領となる當國岩鼻代官所の支配となる承
應三年改めて檢地あり村高二百四十石餘に定められ悉く公租申
付あらる 後元禄五年に十四戸の宅地も公租申付らる 又伊香保の沼を元来當村に屬して沼
の西なる天神峠を村界ゆせしに寛文六年沼と小富士との地は就き
地界の公事起り榛名山別當より官へ出願せし趣にてその頃官
より沼を榛名の神の御手洗池と命じられより沼の地を榛名に屬せ

らるゝ明治元年六月より岩鼻縣の管轄となる同年十一月より前橋
藩に移る明治四年十月より群馬縣となり六年六月廢縣となる
熊谷縣に移る九年八月まで群馬縣の管轄となる
古の温泉垂仁帝の世に開けたりと言ひ伝へまどもその浴場を設
け人の来り浴みすることを伝聞の源なるべし知らず萬
葉以下代の歌集に伊香保の名を見ゆれど湯の事を見えず此の
湯の一の書に出でたる初めは北國紀行に文明十八年足利將軍義尚の世 堯
恵法印一七日此湯に浴せし事見えて又宗祇終焉記に文亀二年
將軍義澄の世 連歌師宗祇此湯中風の病にて入湯と見えたれど

こゝにあるは近くは慶應二年より岩鼻なる代官は郡代に改め
られ明治元年六月より岩鼻縣の管轄となる同年十一月より前橋
藩に移る明治四年十月より群馬縣となり六年六月廢縣となる
熊谷縣に移る九年八月まで群馬縣の管轄となる
古の温泉垂仁帝の世に開けたりと言ひ伝へまどもその浴場を設
け人の来り浴みすることを伝聞の源なるべし知らず萬
葉以下代の歌集に伊香保の名を見ゆれど湯の事を見えず此の
湯の一の書に出でたる初めは北國紀行に文明十八年足利將軍義尚の世 堯
恵法印一七日此湯に浴せし事見えて又宗祇終焉記に文亀二年
將軍義澄の世 連歌師宗祇此湯中風の病にて入湯と見えたれど

二書の文後に抄出す

その頃を風々湯治を地々にうつして久しきまで知らぬなく又その頃八宮を今の湯元の地に天正四年に今の地に移せども言伝ふ末の仁泉亭記近き世にあめてを此湯の奇効を見るべし愈世に顕はれて来る浴する人年と共に多く韻人学士の紀行あまた多し其二三を摘録し殊に近年来質の分析にてよりて希代乃後に掲げ名湯なること高く世に知らむを縉紳貴顕の人此に遊びて且を病を養ひ且を暑を避くること年を追ひて盛あり特に明治十二年奈良の皇太后宮此温泉へ行啓ありせらる七月十七日東京を立たせ給ひ御道筋中仙道を寄り滝川を歴て甘日に当所へ着御ありし大暮八郎の宿を仮の御旅館と定められ供奉の女官にて典侍萬里小路幸子

掌侍錦織隆子、権掌侍鴨脚頼子、命婦以下七人官員にて皇太后宮大夫萬里小路博房宮内大書記宮香川敬三三等侍醫竹内正信其外近衛尉官宮内判任官等以下凡供奉の者百餘人あり廿三日向山へ遊歩せせらき八月二日此を出立せたまひ滝川を前橋を過ぎて東京へ還御なりたまふ此の温泉の申すも畏き面目にて尚千百年行く末盡まぬ榮あるべき御逗留の中に落雷ありて御旅館へ立てらる萬葉集にも伊加保の雷と詠み後に記せられ常に落雷少しと土人をいふ

村民八氏の事

當村民の古くより住居する者を木暮、岸、島田以上三氏を各本末三戸あり大島、千明、永井、後閑、福田の八氏にして本末合せて十四戸ありて土人なれども大屋と稱

し當村に高二百四十餘石并に林野土地所有の民を此十四戸に限
まりて外古より譜代門屋と稱せる者八十四戸にして皆八氏の從屬
なりしが維新の後に一樣の村民となり又他より移り住める者も亦
今百六十餘戸土地を持つ者を今尚大屋十四戸に限れり
八氏の家を大抵天正年中白井の長尾氏の遺臣にして後に郷士となる
德川氏の始當村に三國裏往還の繁所中卷に設け村民を守らしめ
岩鼻代官の支配に属し給料として槍鐵砲等の武器を給せられ一
の延享三年丙寅官より帶刀改めの旨當村にも口留番所なるを依り
十三人の者福田氏の外の者の内に年番の者の外二人づゝ帶刀すべき旨代官伊奈半左エ門
より申渡されし夫より繁所の勤めを係りて尚苗字帶刀を維新の初

に至り又その頃を十四家の者常に村内の年寄を稱しその内に
福田氏と島田氏の分家權右衛門と称せる者とを除き他の十二家の
者二人づゝ年番にて名主と称し関所を守るも但し十二家を十二支
に當てその當たる年を本番にして勤めたり
當村温泉涌口八箇所の中に四箇所を千明氏の所有者にして外四箇所
を十四家の共有なり泉を導き風呂場を設けるも亦十四家の專有な
り湯元宿の称ある泉を引き用ゐるに筧の樋の口徑各四寸湯の深
各四分に制せし風呂場を家毎に四箇所宛定めとり
次の文書を文化七年夏江戸駒込片町の上州屋庄九郎といへる者流
質の鎧櫃の中より得たりとて今の太春八郎の祖父に送りしもの

ある此の書を徳川氏の始て白井長尾氏の子孫の他國へ移されし者共國の有川某等その祖先の舊跡古傳を質問せしを咎めしものと見ゆその文頗長し今伊香保の事と係る所のみ抄出すること左の如し長尾氏の遺臣なるを證すべし

上略 御先祖之被召仕候者之子孫、今當國ニ居合候分之名付名跡次候者壹人宛書付進上申候、中略 伊香保屋鋪者、十二間乗手之名付、木暮下總子、金太夫同八左衛門、岸弾正孫、六左衛門、岸圖書跡無之、大島勘解由子、甚右衛門、木暮新八跡無之、千木良出羽孫、三郎左衛門、此分皆御譜代相傳之者共、白井城廻在郷罷在候、今度我等方へ

被豊候御判為見申候處、彼者共再三頂戴難有由申候、

下略 木暮新八跡無しとあれど今の木暮武録を新八が跡あり

上毛志料より此温泉取立たるを輝景白井の長尾氏なり旗下木暮下総守岸筑前守外都合十二人なりなれども八氏の内最古き者を千明氏と見ゆ千明古を千木良とも書く湯元の地を古く千明氏の所有にして往時を生憂子家居し文龜の頃連歌師宗祇千明氏子宿に室を仁泉亭と名づけしをいふを即湯元の地にて の事なりとて今子湯元に千明元屋敷の稱ありて湯の事に付てを千明氏の由緒最重し 現子温泉涌口八處の半を千明氏の有はしを寛の営造なりを千明氏最権ありて仁泉亭の記子據をぞ千百年前を僅だかなるの村民湯元の

地を住み其地も村民と共に白十明氏の屬あるに後元亀天正の頃當郡武田氏に屬世時千明氏の嗣子幼くして母老の餘氏相續を有司に告げ村を今の地に移し温泉の業を営む土人今に傳へて天正四年武田侯地を七民に分ち賜ふ故に世時の事なる七民とは千明、岸、木暮、大島、後閑、望月（今永井氏に改む）島田と再分して十四戸なる各先祖を温泉を引く官又筧の法を定め千明氏城主を世と筧の事を司らしむ源の地その所有たるを云と雖ども仁泉点記未詳なり然れども次の説次の木暮氏の傳ふる所と異なり併せ見るべし次に岸氏の祖先を往昔伊香保神社の神主なりしかいひその祖某の墓今に神社の側にあり又天正の頃岸

筑前介と兼ねて醫王寺を開基す（案ずるに古とは千明氏温泉の地を有し岸氏神社を守り西氏武田に屬し天正中に至りて餘の五氏外より来りて共に此の地を分ち賜まり武田滅びて後に七氏共に長尾氏に従ひ大島氏を新田郡大島村より出で新田氏の支裔なりしかるべし）

安永年中高山彦九郎が大島氏を訪ひて系圖閲べし事ありの赤城紀行に見えたり

島田権右衛門の家を後に分て福田氏も後に興きる家なりと以へり（或云ふ金田平左衛門より分れと）

その舊記を失ひ文書の徴とすべき（但し木暮八郎の家に僅に来通の古文書系圖等を存せり）據りて纂輯を左に記す

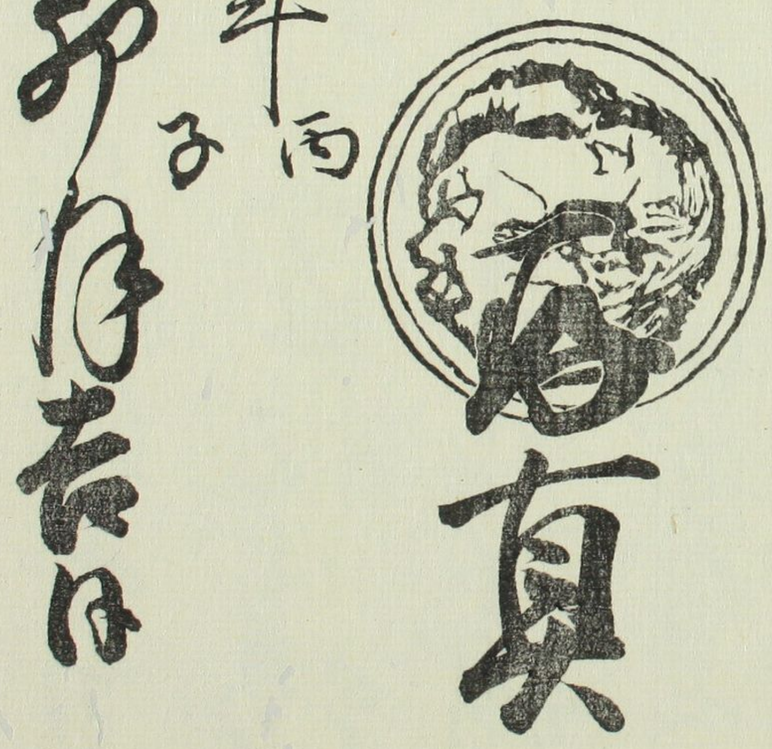
木暮氏（村上源氏にして赤松圓心の裔なりと）その祖を下総守祐利と云ふ伊香保村に住居して此地の地を領して祐利天文年中當國平井の上杉氏に

役ひたるに天文二十年上杉氏滅亡の後い母方の祖父なる箕輪乃長野業政中巻の箕輪の城申合せたるを武田信玄箕輪を亡ぼし後を武田家に従ひ天正四年丙子四月祐利入道し武田勝頼より法名を存真或を存心也と典へらる同十年武田家亡びしかば存真そ、子孫存真或を存心也と典へらる同十年武田家亡びしかば存真そ、子孫代々総守祐行と共に白井の長尾津京入道威玄に屬し持高の地を務しそ當村の支配申し付られ入澤口澁川村阿久津村澁川村の字の東ホの地を至三拾貫文を安堵し騎馬六騎足軽三十人召具し軍役を勤む白井落城の後を小田原の北條家と申通じその後天正十八年徳川家康東に移られし時忠節し同年井伊直政箕輪の城主となり此度この地を領ふに及び存真父子を客分にいたしかの陣の時直政の所望

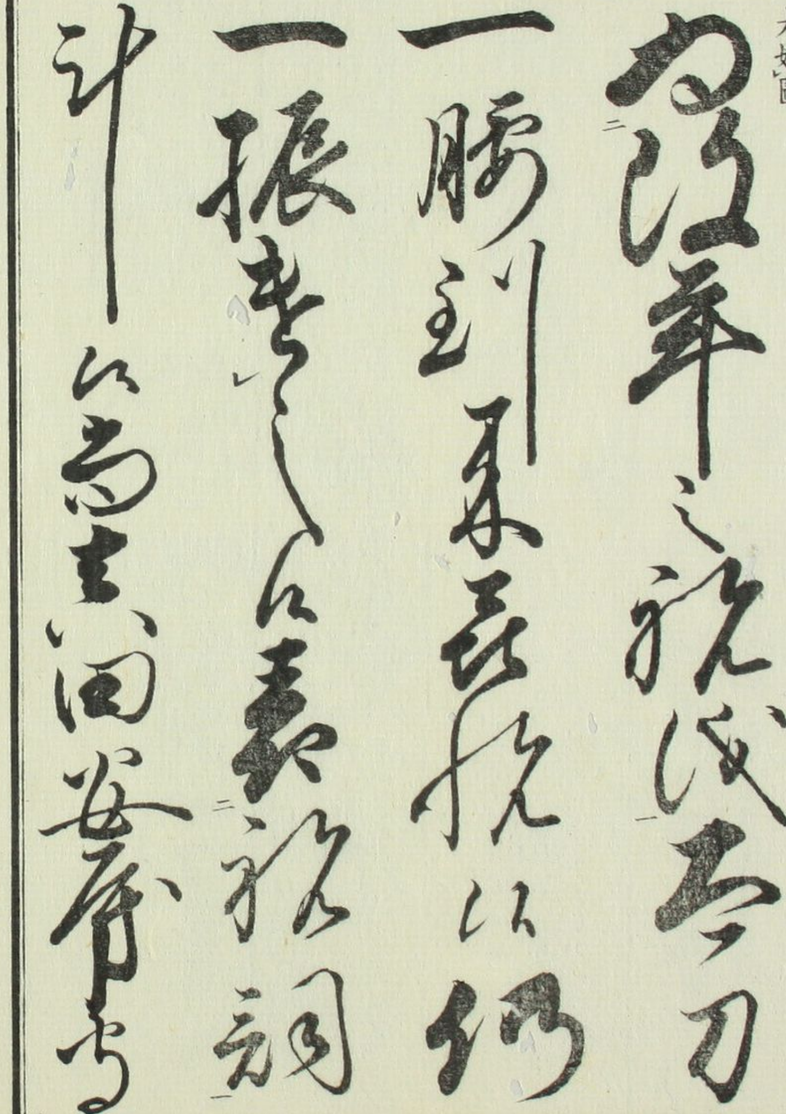
に任せ祐行の次男藤太郎を直政に屬けて出陣せし井伊氏近江の佐和山に移る後近江國犬上郡犬尾子村にて知行二百石典へられ直の一字給まりて名を直信と申つ後大坂の陣の時井伊直孝に従ひて武功ありて後父老いて故郷に帰れば近江へ呼迎へんとすれども代々居住の地去り難く後兄を早世し父も歿し久しく直信井伊家に暇を乞ひて伊香保へ帰り家業相續して浪人なる然るに由緒ある家なれば郷士にて騎馬足軽名具し軍役勤むべき旨申渡されし代に用言怠るを以て存真を初行子家を譲りて天正十八年十一月樂浴堂屋敷今の八郎の屋敷なり子隠居す祐行が次男孫左郎直信家を継ぎ改めて金太夫と稱し三男孫兵衛祐直を祖父が隠居の後をお續して名を八左衛門と改め今八郎と云祐直の次男新

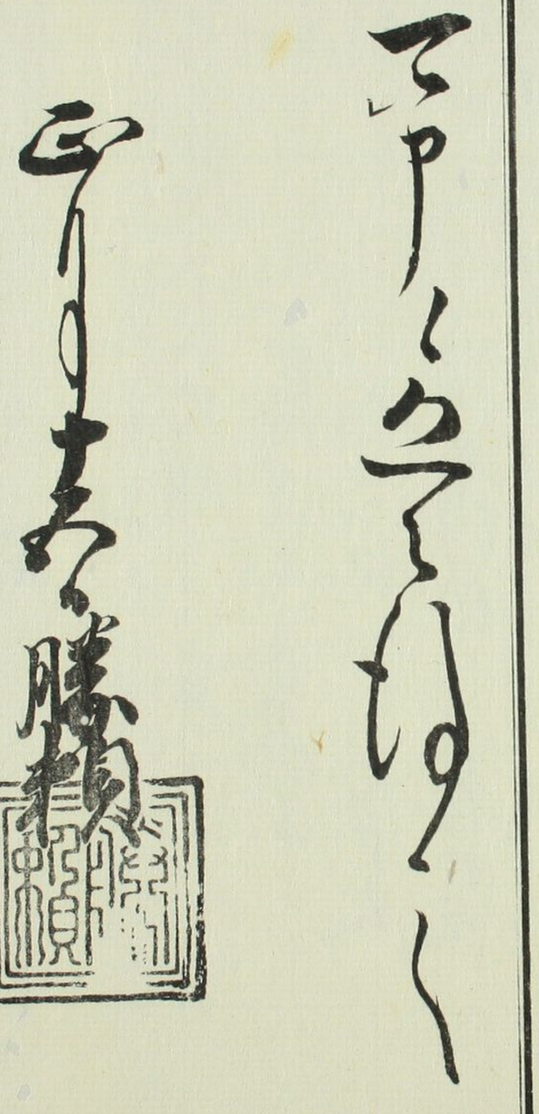
八郎別家して武太夫と改稱し今ハ武此の三家代々その名を継ぎて今
に至るまで寛永九年當村代官文配とあらしめしより以来を百姓並の
姿なれども歎き直信の子直盛子寶永三年先規のめく地士とふめ
騎馬足軽の軍役を勤めんこと願出願世事なりその後延享三年当村
開所當番二人の老ひて帶刀をゆるしに依て寶暦五年同
八年両度再先規のめく出願せしかども免許無し先祖存真入道隱
居の所自携へたる古文書數十通今皆八郎が家に傳
へたり今その内を摹寫して掲ぐこの外木暮氏一族より尚文書
刀剣の類許多傳へたりしが代々數度の火災に失せて今に傳へ
ざる

木暮祐利入道スル時
武田勝頼ヨリ與ヘラレ
シ法名ナリ朱印奇古ナ
リ勝頼ノ印ト見エタリ
原書ハ大奉書紙横二
折中央ニ此名ヲ書シ末
二年月ヲ書ス大サスベ
テ圖ノ如シ今縮メ寫ス



大如圖





此勝賴ヨリ與ヘラレシカハ左文字ナリト云フ今傳ハラズ真田安房守昌幸ハ沼田ノ城主ナリキ

卯朱ナリ

縮寫二分之一

定

一湯坪　并　持高之事

一火澁　之事

一酒運上之事

一入沢口　拾貫文

一阿久津村　弐拾貫文

長尾輝景ノ
子尚拾遺ニ
委シ

右如前之令所看也

天正十年　午　二月十五日　輝景

上州白井城主長尾輝景後ニ入道
レテ威玄ト云入澤口ハ澁川村ノ内ノ
字ナリ阿久津村ハ澁川ノ東北ニアリ
天正十年ハ壬午ナリ

定

一他所ニ流出ス間不可
不越事

一湯治ニ者ハ名跡ヲ人ニ譲ル間敷事

一御家ハ御書ハ勿論御勅事

一湯稼ニ成ニ為ル事

一其他何事ニ成共ニ

不苦下ニ為ル迄ニ程ニ無ク
ニ成ル者ハ
右ハ
天正十一年三月吉日

縮寫二分之一

此文書誰人ヨリ下シヤ詳ナラズ花押モ知レガタシ

縮寫二分之一

宝

伊香保

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

[illegible]

右之ケ条[illegible]遠[illegible]軍[illegible]

[illegible]

天正十二

十月日

[illegible]

花押ハ長尾輝景ノナリ

縮寫三分之一

定

一 薄（バクチ）打（フクビキカ）六賽打（ロクさいうつ）事

一 喧嘩（ケンカ）口論事

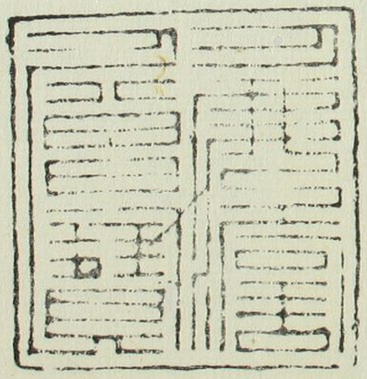
一 國質（くにぢち）ニ成（なる）事

右三ヶ条出（いで）ニ付（つき）停止（ちょうじ）之（の）儀（ぎ）

天正十三年
二月十八日

此文書何處ヨリ出デタルヤ知ルベカラズ

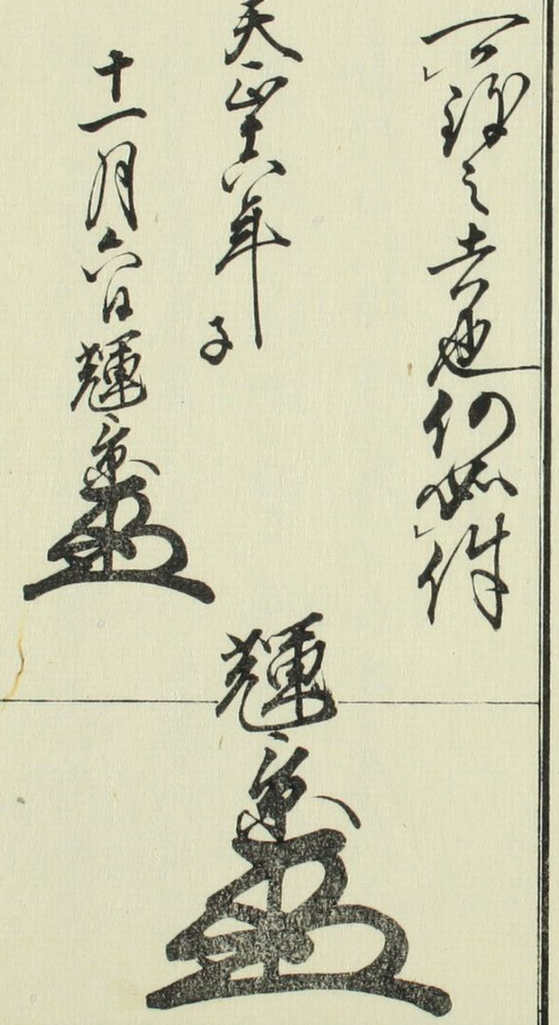
印 佛法僧寶



道

藥師堂屋敷
トハ今ノ木暮
八郎ノ宅ナリ

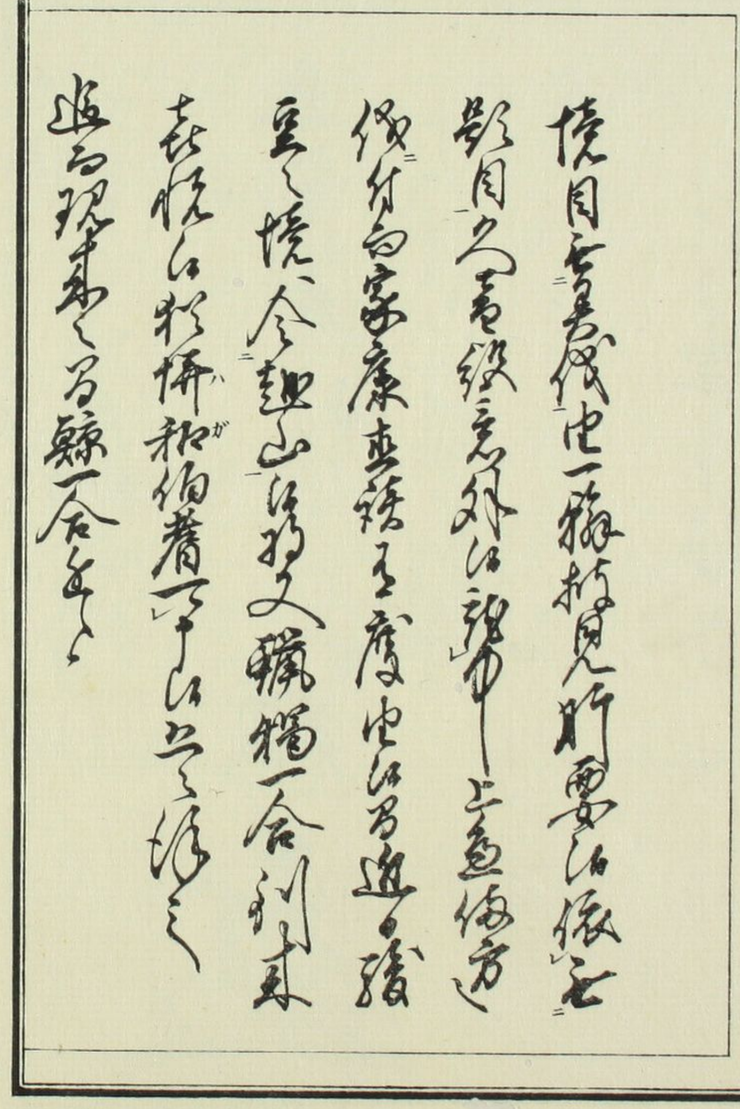
縮寫
三分之二



天保六年
十一月廿日 輝兼

本書寫ん

縮寫二分之一



二月廿四日

本書ハ下總守

一合八一匣ナリ 天正十年瀧川一益前橋ヲ去ル後小田原ヨリ坪和伊豫守倉賀野ニ來リ居リ上州ノ事ヲ執行ストアリ坪和伯耆其一族カ

本書ハ下總守

縮寫二分之一

知行高壹萬石

大尼子孫右兵衛尉

合弐百石

右父直政ゟ被仰付候由

此儀ニ付而之物

壹通ハ元和五年九月十日直紹

丑歳ノ略慶長六年辛丑

井伊直政慶長六年二月上州高崎ヨリ近江ノ佐和山ヘ移封セラル同七年直政卒シ長子直継後ニ同ギ同九年春佐和山ヨリ彦根ニ移リ同直勝ニ同ギ同九年春佐和山ヨリ彦根ニ移リ同十九年十二月弟直孝ニ家ヲ譲ル木暮藤太郎ノ事ハ本文ニ委シ

縮寫二分之一

佐和山城之絵図

ゟ彦根ニ城之絵図

慶長六年

本書壹通

岡本半介ハ井伊家ニ名高キ家老ノ家ナリ

木暮氏略系

- 源祐利　木暮下総守　入道存真　天正十八年八月朔日歿
  - 某　木暮弥次郎　廿五歳歿
  - 祐行　木暮下総守　實惣社勝山城主關口若狭守次男　室祐利長女
  - 直信　木暮藤太郎後金太夫　仕井伊家後歸継家
    - 祐直　木暮藤次郎後八左衛門　承祖父祐利隠居別家之後　正保五年二月八日歿
      - 則藤　木暮又左衛門
        - 某　木暮新八郎後武太夫　為叔父直信猶子別家
        - 某　木暮武太夫
      - 則重　木暮八左衛門　延寶七年十月八日歿
    - 直盛　木暮金太夫
      - 直定　木暮金太夫　寶永

○附録諸書抄出

萬葉集伊加保歌并解

萬葉集十四の巻上野歌の内に伊加保の歌九首あり今左に挙げ萬葉考并に橘本直香の萬葉上野歌解によりてその大意を解くまに伊波保呂安蘇山子持山の歌を附す

伊加保ゆ雨雲の続きかぬまづく人ぞ恋ふる児等

乃を河の下ゆ通く助辭ゆゑ設語あり　かぬまづくは解けば

或云かを設語ゆゑ沿馴くの義なり或云加沿なり地あるときは

其地知られず或云束の間の約まるなり　或云おらぶ山なり

じく言ひ騒ぐ義なり　児等は女なり

大意を伊香保に雨雲の連續に羣を設つめく汝ゆ故ぞ

子人〻言ひ騒がるゝこゝを今を否までいざや諸〻も子寐しあ
を妹等ゝといふ先生
伊加保ろの岨の榛泉奥玖匂う絲を眼前し空のば
岨を山の峙てる處あり榛い字の如く今のきあり古来萩
まゝといふ説ひ紙と余を取らば説長けきば略す
大意を伊香保の岨の榛乃泉は生ひ茂りたるかくく見ゆるとく
奥深く物たい絲を思ふと匂を眼のうゝあだ子冥くひくば未
を未のようをこゝひゝめ今先達まんゝを
伊加保ろのやさの堰子設ひ虹の顕ろまでも指寐を指寐てぞ
やさを八尺まを深き心をいひ或を彌坂ろを坂多を處ゝも

ひ或を湯坂の軸を今の伊香保温泉の地をさはゝもいふ堰を
田の水を湛へ行く處をいふ今水澤村の井出野を舊地あめと或
を井出村をもいふ共を中巻を或を伊香保の沿水の落つる處
を井手又やさのやりをも云此説疑はし或を萩原村利根川のよう廿
町許あり名水ひゝめ坂ひるを井ひゝ各數八ひゝひゝめともいふ
にゝの訛顕ろまでを顕ろまでの訛ゝ指寐を男女手を手を
指し交ひを寐ゝ事を
大意を伊加保の堰よゝ設ち上る虹のかくようや人子顕ろ處
子をるとも思ふ人を飽くまでも指しちゝつゝ寐たくば嬉し
かゝもとあゝ或を未顕まを惡しゝもゝのゝで相寐ることを得を

しるべの意あるともいふ

上野ぬ伊加保の沼を植名小水葱打寄せん子を種求めつる

ぬを之あり水葱い水草にを今云水ゐのひまりその葉の細きを

小水葱ゆいふ花紫をゆゆを美しく古を植ゑを食用ゆる

大意をかく窓しかくむやてを言ひ初ゆゑ植ゑをる小

水葱を借るを種求むる寄ゆゑす

伊加保夫よなのくしけ思ひどろ隠を為つと忘を為ゑつる

夫を知りゆ男あ　あのくしけゆ解き難し集中の難歌あり

といふ或云なのくしけをあのくしけ繁ての義欲ゆどろを雖乃

訛あり　隠を隠事にを忍び逢ふ事あり為ゑふを為ぬの延

びたるをなり

大意を伊香保子にを思ふ男を吾をあるく繁く思へども男

をつまあをのみまをあを訪ひも来ぬその男ゆを忍びくゆ隠事

せしゆ忘らるぬといふ意を

伊加保嶺子雷ふ鳴ゆを秋方にを故を妻とも児ゆを依るを

大意い伊香保嶺子雷鳴ることを勿れ吾ゆ方にを何事も無れど

も妹の怖ゆに依るをを鳴ることをあるれとなり

伊加保風吹くゆ日吹ゆを目ゆとゆゆを我ゆ恋の況ゆ時あるあり事

大意を伊香保山よゆ吹きゆる風を吹く日もゆゆ吹ゆを日もゆを

ゆゑも吾ゆ人ゆを恋ゆるゆを止ゆ時にとあり

上野ぬ伊加保の嶺ゆ降る雪の行き過ぎ難き妹が家のあたり

降る雪を降る雪の俚言ひて雪を行きてかけたり

大意を妹が家の雪ぞ行き過ぎ心殘りて行き過ぎぬとあり

伊加保ろの岨の榛原伐ず衣着き依らしを依るの延まり榛を皮はぎし物を染め又若葉にて衣

ず摺を著けそも染むるれを摺衣をいふ

大意を榛の葉にて衣を摺を着け染むるめく妹が吾を著き

依るヨマアその妹が心一向とおもへばをとあり

伊波保ろの岨のつゝ松限りとも君が来ませぬ心ぞあるらず

伊波保をその地詳ならぬ或を伊何保の誤あらん然前の二首乃

岨の榛原と語氣同じ

大意を伊加保の岨の小松原の外を崖にて限りなるめく君の

絶え限りを来ぬを心も空しとあり

上野ぬ安蘇山葛陸奥延ひはしものを何ぞ絶えまを

安蘇山の解を中巻ゆ出でたるを葛を泛く蔓草をいふ

大意を安蘇山の裾野の廣きが故ゆ葛の心乃まに遠く長

く延ひ互をしめき互の中あれぞ今を如何ゆすとも絶えは

せじをなり

子持山を群馬郡の北部中山峠の東ゆ乃上白井村を屬に即

子持山ゆ生ふる紅葉づまで寒ゆ我を思ふ妹をいかゞ思ふ

子持山を群馬郡の北部中山峠の東ゆ乃上白井村を屬に即

伊香保の北の正面の小野子山の左手並びを聳えたる山まり山
頂に大なる岩つまり形大岩の小岩を抱くるがめしる持岩
小いひ山子持明神の社の若蛙を嫩楓まで紅葉づ
まりを紅葉する頃ぞ春より秋までの意なり
大意をかく二人寐て水く寐のうねぞ春より秋までの久き間か
おもはの頃に吾ハ寐てけりんと寐て汝をめ何に思ふ
なる　古今六帖上下の句を寐んと
思ふを妹ハ此の上なるなり

伊香保の古歌

古今長歌　呉竹の世々ふることあり世もいのの沼の底を思ふ心ぞ
拾遺　いのの沼の底を思ふ人を今一目見ん　後人

新後拾遺　春の旅ゆくるいのの沼の底を思ふ心の深ん青雨の涙　順徳院
拾遺愚草　唐衣かるいのの沼水をもぬくのやなをひく　定家
夫木　東路のいかれの沼の杜の神のはるをあるを見ん　顕仲
同　いかれの沼のいのの沼の底の深を雑の歌　行意
同　建保百首　五月雨のいのの沼のあやめ草いつと花ぬらん　家隆
同　みちのくにいかれの沼のいのの沼の底の深を知る人　知家
同　いかれの沼のやいのかなるかの沼のいまかき波ふるん　同
同　帰あく伊香保のぬまにすむ蛍を孫をこのらの行能
同　水の玉藻の底やまもるいのの沼の夕立の宣康光
同　世々しらの立の藻の葉の沼のみのれをあま為相

叩けどもあけざりければ女の泣きてよみける 俊成女

男ありけり、つのくにの国の守にて、かの国の人の娘をよばひけるに、いとかたかりけれど、

丹波なる桂の里に通ひけるを、かの国の人、国の守にいとなりけれど、

忠定

なりにけり、一人ありける娘をなむ、いとかしづきける、

範宗

知らぬにも君にしたがふ身なれば

堯空

あやめもくらぬ恋をするかな

道堅

六帖

古今

此歌は、男、女、共に、伊勢の国に、斎宮の下向したまひける、

この歌の、たまはりて、国に、宣し、伝へしなりといへり

夫木

久方の天の雲の、のぼりにし、あとの、はるけさ、

頭朝

此歌は、風流、二日、ふつかの、夜、あとの、袂を、かたしきの、

伊勢国、桑名郡、長島、

夫木

ふる雨山、なかなかに、なかなかに、

俊頼

北國紀行

堯恵法印

上略越後の府中より趣き、略八月文明十八年の末、又旅立つ略越後信濃上野の境三國峠を以て越えて信濃に略重陽の日上毛白井といふ宿より、つるぬ則藤戸部定昌藤を藤原なり戸部を民部之即上杉民部大輔藤原定昌を云

旅思の哀情を施す略是より板道を伝ひて草津の温泉に二十日程入湯を略又山中を歩して伊香保の出湯に稼ぎぬ略一七日伊香保より伝ひて出湯の上なる千巌の道をもすがらに攀ぢ上りて大なる泉のそばの一方に傍ひたる高き峯にのぼりぬの嶽といふ嶽より流れ泉のそばに

ふん伊香保沼といへるもそこなる往跡も易絲分け登りて
庫裏なかるいのかの沼をもそこなるをぬくなやめをぞ引くを結ぶし
京極黄門の風姿淑て妙あり枯きたるこのやめの根霜を常びたる
手交きる杜若の莖あどまぞ昔あつこと覚えて
種しかくそ伊香保の沼の杜ゐ掛けし衣のゆのうもあし
神無月廿日あまりて彼の國府長野中巻箕輪の陣所に至る晡
時ものあり此の野を秋の霜七なりそ戦場以ぞ拂をそ軍兵
野に満てり略定昌の指南にて藤原頭定開東管領の旅衆の心
一つめて旅宿七本陣に移さし後を厳霜七はぐやつあり平の頭忠
長野俊理虎陣所にて會略武蔵へ行き又上野へ皈る九月十三日文明十九年此歳七月廿日長享と改元す白井

戸部亭にて略九月盡て長野の陣所小野頼景が陣にて暮秋時雨
雄の袖の姓の別きの拵のもは裏紫を閑なくしてて
十一月の末て略白井の人に餞別せして略廿七日山雪て向ひて
朝立ちは利根川七遥て見遣にて略明るれば三國山を越て
侍る略

宗祇終焉記

宗祇老人略越後の國て知る方に求めて二年ぞ送られぬ
空聞きて文龜初の年略六月の末駿河の出よりて一歩七きめ略
長月朔日浜て越後の國府て至るぬ略年七暮ぬ略又ぐらふ
車きえかへて略更衣の末つかたぬ都のうちまして打

釋宗長

置きぬ上野國草津といふ湯に入りて駿河國に罷帰らんの由男ひとちぬるといへど宗祇老人略つれ伴ひ侍きかり略ふど
このほしるぞ打捨て國に帰らんもつみえがほしく略ふるびぐてを信濃
路にかりて略廿六日 文亀二年二月なり
き國に伊香保といふ名所の湯の中風の為によりまど別きて宗
祇を其方に趣きてこれにまでの妙此の湯をもづらひてめ
て湯に浴して車もふくて五月の短夜せしもつのしらびぬるかや

以ての外の山法の者至尾に寄うらむ夜の老の袖あて

此後宗祇を武蔵に至りて病甚しく相模の箱根の湯本に至りて死す文亀二年七月三十日八十二歳なり門人宗長宛て送りて駿州沼津の黄瀬川の上一里許桃園山定輪寺に葬る宗祇を紀伊の有田郡藤並荘の人飯尾氏なり幼にして律僧となり連歌に長ず

東路の裏

略永正六年八月十九日 上野國新田の庄に大澤下總守宿所にて草津
湯治のまゐりあひにて六七日にあるに静喜にて又連歌なり

かりそめ衣きぬや吸き水に伊香保風

かりそめ衣以かりそめに枕河に旅の心をそへ侍るにあり越州談向
の心にてその由にのほしるぞ彼の玉静謐の心也にるべし略草津二日路許
隔て大胡上總介館にあり略長月四日なりぞ略にて野山を過ぎて
青柳にて八里にあり略此の宮にて伊香保のにつしもぞ見きそよ
このうも無うにて荒時和泉入道宿所より少て立寄るべきよりあり
暫にて夕日にあり冬の手にし来にしてと思ひえもんぐ〜ぞ

屋敷をもうけし社の夕日こう郷
略 ままの河といふ處より松田加賀守法體して宗繁此十年餘り
ありと言ひつたへ侍り八九年の先の年宗祇此路より相伴ひ
信濃路より例まうでしより此宿所にて廿日餘り逗留懇切の
忘れ難き事なるべし 略

宗長は駿河國益頭郡島田驛の鍛工の子なり（或云近江の北村の人暮年より駿
州に住むと）駿河の守護今川義忠に仕ふ後に僧となり宗祇に連歌を学ぶ
此書は駿河より白川の關を見んとて旅せる紀
行なり享祿元年三月十六日八十五歳没す

山吹日記　　日下部高豊

箕輪の故城跡西門の跡なり空堀三重櫓臺西南を高し山川廻り
流れ西郭の間石二ツなりと云　矢原村　柏木箕輪の間　龍門寺は業平朝臣

の末なりひ住なひし所なりいなべ長野氏はその末葉の　箕輪の
城跡より東の方八町許に椿名大神宮まします石室の上に宮居立
まします榛名椿名一山と関ゆ此事誤る前の三神の辨の部に論せり　榛名石神村の畠中
に忠懐忠存の墓なり建武の頃此二人は吉野の御味方頼印を
上巻座主の池の　足利方にて斯に戦ひ両人討死せしと葬ると侍り
安見合せべし
榛名大明神は元湯彦命なり満行將軍なり埴安大神ともいふ
元湯彦命と申す御名は大成經に出たる説なれどいまだ考へ
に見えねど用ひかたし満行將軍の名もたんく聞えざれどなほ
ふし埴安大神と申すぞまづそうべくしきなりあり　夜　十一

慈悲心鳥の声ちかく聞く　榛名の沼に至りぬ古への伊香保の沼なるべし沼の汀にちかく墓の標ありて是を当縁野郡の木部何某なるものやいひける人の此沼に身を沈めたるが墓なり古き標を水に入て失せられぬぞ再作りて立てたるなりといふ其石を古きものならねど善く見るに明徳の二字あり（此二ツの墓事跡誤り里中巻に見るべし）　以前の古のものゝなごりとて沼より伊香保の間なるべし　氷室が岳の傍に岩垣山といふありて其の近くに池あり座主の池と云ふ頼印座主の住みし所なりとや岩垣沼などよみし所にやとおぼしく古き歌にもよみ打ちまかせたるなりけれど所の名なるべしとも思はれず　湯前明神を拝み奉るにぞ伊香保の神社なるべき　水澤の左に

船尾山をびてたる傳教大師の開基にて昔は大寺なりし我千葉介胤正攻め亡ぼしてしを今は寺跡　有馬村にも甲波宿禰の社あり御旅所の

日下部高秀、字東進、仁良齋と号す通称を今條貞右衛門宝暦元年歿す壙保己一は此人に学びしとなり此山吹日記原本手に入らぬ今上野名跡志の引く所を抄出す

伊香保の道ゆきぶり　倭文女

上略　上毛野の伊香保なる出湯ゆみにとて母君に乃るくのにし伴ひ給ふれぞ弥生の十日あまりといふ日（寛延三年三月十一日）に立出でたる又おぼしきのいと多く覚ゆるわたりより送りて聞こえしの木風もきのふれしよりも雪も消えず、なりといふをなどたのみて　略　る瀬

川てふ川神流川を武蔵と上野の間にてつゐに遠方の雲のひ
を見ゆるを信濃なる浅間の岳なる水の有なるべしなる伊香保嶽に
星をかしんいん暑妙義の山色もまた未だ暑さのあらの雲も待ちつゐに
を以て秋間の里てふあるを雲の雲にうきぐ榛名の山を以て
神ぶりたる雲指をうつたんめと巌をくて峯のようなるまで繰
しも清ぐ見知らぬ雲なるなるめりる雲まを雲にうつ初めて明ゆのぐる暑
にのぐしの岳を霞みを烟も見ハ分のぐ伊香保の沼と関ゆを吐きう
ぶるを以て人ぐ来る人も[系]此大神のまを洗ぶをいりくうまる沼の
にうををうんまぐ人とおしまるにいめ雲かをうゆのもぶ雲雲
ゐ至雲をとかくまるわぐ更ぐたゐ暑日長けて初き雲見

るけ初ぐの一の世う知ひあ雲をうしぐ海まる垣根をまそも
隠せるを折けうれを新あ外面の梢ども乃中け櫛の一木
まぐちぐを立てる紙累年有が「ひの和風以ひまる人分雲へをの
この雲をまかの海を弱しうん暑二人三人立出を山雲をゆうけ
眺る雲ぶる赤をまを萩を緑深くまめぬるをまを書を
雲なを雲とを見やるに巻てのそれ峯のいく白きを花を[系]もにうぐ
雲まめる程暑山かうけ寺をゆあみをる人を守雲ゆ法
佛の雲をといへを雲雲をたゐ御前の短冊け書をたる掛けを
面雲を見ぐ「秋深き山の紅葉を折ほ雲をうんとをきぬを
とこを最をとうんの我覚えず殆巳えれぐ書きつ暑人の夜

又雨風烈しう物騒がしき心地するに雷さへおびたゞしく鳴
り出でたる程思ひの外なれば打驚きて堪へかねてふとうつぶし
たるまゝ小頭のうへにも何やらん思ひもわかずおもしくとおぼゆるを魂今
ぞ失せぬると思へまさるに暫く間ありて何となくたゞ此透垣のあたりさ
へ落ちたれど理といひて恐しなどぞ言ふに耳もなれば暑さなく早に
なりまさりつゝ見えしかばいでや端に出でて見るに峯なる巌を更にす
さまじき程に雲のまよふのみぞ物恐ろしけれさればかゝるなら
ひとて朝ごとに鳴り出づるをそふて家の長の住める所には一時も驚かで
あるにも甚じて生きたる心地やはする中の時過ぐるまどろみもやら
ねど名残なほ峯をも絶しうて打ちまどろむ心地もせざりき今しも

寒き変ならねど大きなる平なる岩にほどもなく枯れたる木の
枝ひとつ折れるが長三尺ばかりなる枝二つ四つ打ちくだけたるが暖かに火を
焚き置きて炯もなくかゞ人とともに団居しをり何かはしらぬ窓経を
読みていと物すごくしてむしたる虫をそらだてあれど夜の中の時ばかりて
頼もしき心地はせずかく閑居なれば此湯の水上をこれよりはるかに見ゆる
高根より落つる水の火石といふ岩二つ二つ岳のながれて幽まで
かく湯なれどいと冷やしきなどいふの岩に耳ふられたる夕
つゆも空は晴れたれど元の処へ返るに彼の桜をいと乱れ乱る
散れば楓風吹く日暮れの日のくれてはかなき都をば出でて
桜の暮れより八日に立ち出で家どもの軒に皆

京橋弓町油谷氏伊勢屋平右衛門ノ女ナリ

篠の葉をしたる山里にいつもかく習はしたるといふ雪ぞ
この人を稀に夢のやうにぬべきものなれども暑のあまりにゆゑ
ぞ尋ねの爲門を度る 下暑

此倭文といふる女子を江戸の弓町に住める某の女子を真淵の門にあり寛延三年十八歳はじめて此記を書く後夫持ちしが寶暦二年七月廿歳にて死す その遺文ある此記并に消息文和歌ども集めて文布といふる一巻の寫本とあり 傳もあり村田春道が寶暦八年の序にの真淵翁が倭文女の碑文も載せたり 又本文假名文あるを多く漢字に交へ書きかへたり

伊香保道の記

山岡明阿彌

上野の國伊香保なる出湯にけんと思ひ立つ暑十二日 寶暦十四年四月 今日は伊香保に行きいるらぬ夢をも聞けどいと嬉しく曉起きして出立つ此のまち 高崎 驛 を木曾のなをつぢあれぞ夜日に人の行きぬひ

ちげく 略 元宿とやらんいふ處よりあ便宜にして細き路に入りまして
ゆきぞ又田舍だつきのかち野をゆき山谷坂をあををゆきくしまの
柏木といふ里にて書の餉をもの食ひ或人の牠をひたぶれど鷹の卵累ね
たるやうにしたるものの水の葉にて盛りて来りぬれば家にかへれば
笥にてこそ盛るべき筑紫にてめづらし此を里にて稀路遠し山も
嶮しあどりいふ 略 ぢうて山路にて入りゆくにて限あり遥あき心地
すれの志を伊香保の山を眼の前に見ゆれど行く路を七尺に曲
まる瓊のめぐく佩のゆれのたるまるかにて似たれど只後方をもて
歩むの如く行きあづきいふ 略 屋うやく高う登りゆくにて打顧れば
ぞ仰きに見し高き樹もいつしかの足底に見まをれ向ひに見え赤城

の山も傍てをのすがぞ實に遠くも来て今日のあとうめこの左の
四里右て物見を奥深う行きてゆきを水澤ぶりの山路て来ぬる
ぬるほも観世音菩薩立しかたふ蘭のおそくまを十二ばかり山の
番て行くせ寺一御寺とぞ御堂もおの頃営みをしあどきらく
しう見ゆ略ぬるを又山を回りを登りて右の方を尾崎ぶぐく遥こ
を見渡ぬるて利根川を帯のごと見ゆおの度き高野の江谷に渡
りを細う千條て分きたる路の緑を引おきんたるもあるその中て
人馬ぶふう羣行きを蟻といふ蟲の熊野詣おをいふ人てはも似う
水澤といふぐ以づら水もほをるを下りを又向ひの江て上りて地黒
澤と以へぐ路をすぐを白うもらぎ多しぐ此ハ水無澤白澤ぶぐ

こをいへてしをふちきのしう言ひおをいふ斯くを行くて路の空
の叢を分けを せらぎ流るを水音聞ゆ略路あを人の見を温泉乃
流のおあるを教ふるぐ以と嬉くをはるを近づきぬるを地くそし
せちのく草をしを坂路を上りをのらしをその居るぬを家てたり
きを略十二日朝て日高て起きいで見めぐらせぐ四方にをちを
める山を屏風を立てたる狀の山懐て見馴きぬ家ども多く作
りをけ多めおくて湯浴をんとて入りを来し人を老いたる若お
もををら行きひをのするり物商人を夜日をいをぐ入りを来を俱
しをのを原などいと珍し略斯くて日數も経きぐいを徒然て心
のゆくをしあるれば打連きををを山空紙見廻りて山の形も

里の狀を廣き路を中にせをきて相向ひて家を作り蜘蛛の條
小路を十餘里二區閑なる表裏に作り重疊たる軒は長人
里そのまゝの中に槻を伏せて出湯を引きて右に左に細き筧
しを家ごとに引き入れて湯屋にも槽置きて瀧のごとく落しかけ
湯浴むる人をその槽に浸りて瀧に打たるゝ樂をいとの堂を山の
尾の長うとし出でたる上にまた城作りかけたるぞ路い石の坂し
て昇り降りは此湯をその上つかたより遣りこうるしぞもゆるよ
水のかけまゝ〳〵低きに就きて流れゆく形の略その町のいと上
ぢ方へ登りいまゝ名に負ふ伊香保の神社立したまふ宮
居いと物ふる神さびたる處の人を湯前大明神と申し奉るとこそ

略後ぞ瑠璃光如来立したまふ略見めぐらせば御前なる
桃櫻の花どもは今を盛に咲きたるぞ以ゆ孫し略そこなる法師の
庵に立ち入りて物問ひあどきたるに小田舍人を珍しう物よく覺え
此御神の緣起などぞ〳〵と語りをれば挽物工のなりわたりて見
ありいまゝしぞかしう種々の物乃形作りを出せる略又此たの比人の翁
慈に醫師の才ありてそこつ山谷を求めて草木石塊をぞ採り
そて來て略此のこゝを兩屋あるたびにぞ略夜をだに安くしい
と祈めるに彼のよりを吹けば宣ひしたゝ今もまと思ひ出でゝ「伊
香保風吹くたびにいとねもそよ旅寢のまくひたりくるかなぞい
まゝ〳〵たの月卯月七立ちぬ日數も積もぞ歸りぬべき程近うなりて

今日明日出で立たんとするまゝの人とまどる惜みを又来ん年も
かゝるべきなどいへぎまずぶ立ち別るゝことあどるれ惜しみもぞ此住る
家の常に侍る居し柱も弁の花をも今をかて宿離るぬるもいつる
古言ぶき付けしも以と有るげ有るを皐月四日子故郷をの文も
を迎への人々も来しぶぎいぶ嬉しと今ハ出でそのつとあて五日朝出で立つ
略路をこの住を々の家の向ひも谷より細き山路を登る嶮しうと
袴ぶる坂せ曲がく切通しなどいる密ぶ有れぜ左右の山の腹も
路も皆白土の砕けたるが凝鹽の散る霰の吹き寄せたる状ある上
坂行ぎぞ足元いと危く多どくし是を冬の経をいと寒き霰ぶを
皆氷ぶ閉られ有るが春にあれぞかく砕け落つるとぞいふな

せ過ぐれぞ高き廣野せ行く山の尾岬遠う長う見やらるれぜ
この住る人里の家どもも梢のかをに見ゆるが名残惜うて隠る
まで頗のをせる三國の山草津の山をぬど雪の消残るを麗斑
ぶ見ゆるを行き盡せぞるぶ有るが假初の篤の篠屋立てり
人ども立ち寄まて暫休るぶ痩せ枯らぶ有る箱二人居を
まるれ物語ぶ背の山を相満の嶽並ぶる峯いるつ嶽をい
ぶる出湯ぶのまど教ふれるを風ぶと疾き霰まを時を今夏
の半ばまど空の景色を更衣ぶめの狀して野山の草木
もまぶるぶ青みたれど尚枯れ残まて行る茅薄の高き中せ
行くまるら猪狼まどまぶ人を惡しき獣の畫も対ぶるを

あど聞くに恐ろしき事いふばかり殊さら行き交ふ人さへふつに無
くなれば物ぐるほしと心細くて妻の状をつくづくと心
もとなく思ひ乗物急ぎ左の方に高く圓き山見ゆるを沼端の富士
とぞいふと人や實に略その山富士に覓たるに略その麓をめぐりて
行くに前も後方も傍も皆山なる立ちめぐる中にて思ひもよらず
眼もまばゆく廣き池にて山の翠を湛へる故にや藍よりも尚濃く
黒く水たゝへたる状にて中に伊香保の沼なるべし水草も
生ひず菰あるいはのみ見えず塵ばかりなく池の中心清く澄みて
底ひも知らぬぞ遠くにやぞ漣波の間もなく来寄せて洗ふ
岸は渚なる礫石のごとく敷き並みたるごとく向の山も多くこゝに

こゝに向へる状にて何の物恐ろしき気あるあたりの事聞こゆまじ
くて供人にて物問ふにぞ知らぬ男出で来て言ひ教へ
を榛名の御手洗にて侍る昔此處領ぜる人を木部の弾正某とぞ
申しおその守の妻はひとり花見んとて見めぐらいて此の池
の面逍遥しけるが汀に立ち寄りて吾をこの池の家にて
捜さんものをと宿世の因なりて假に人にも見えつるものを今は帰
るべき時なりぬその事帰りてよきに傳へよといひたりつるを
わが落ちいかぬ御達従者どものわて怒ひくとて如何せまし
といふに恐ろしくせんすべほどもなくにゆるぎ波風起りて八
尋許の大蛇をなるとて這ひもとゝ失せぬといふ今は

此池の主だちて堅くまもりいろづくを捕らんとて網引漁あり
誤ちて此池に向へば必雲起て波風荒き火雨降て行き
間なくすさまじく恐ろしくてその志るしの塚あり
以ていけば堅く閉ぢて見もやらず山路をかすめて行く細谷川
の石橋踏みならして尚行けば程なく榛名の宮立たまふ社の
宝殿此面彼面たゞ石のみ峙てり臂折まがるべき段階を登りて
見れば宮柴太しきを分て千木たかのしるきを瑞垣かこうし祝司
ゞ打ち鳴らす鼓の音いかゝしう乙女まの掻い振る袖もゆたかにいかり
ぶに堅くかゝる神ごゝろゆかしうたきちびたる玉垣立て
多賀籠石をうやいへるを塔の層に狀したるを實に經るゝ年の

山岡左二右衛門伴俊明字ハ子真隱居剃髮シテ明阿弥陀佛トイフ道阿弥ノ族ナリ安永九年庚子十月十五日京ノ旅寓中ニ歿ス狂名ヲ大藏ト又トイフ

數多やよろみたる[illegible]尚此外にも呉服石山伏石地藏ゞ嶽、弥陀ゞ嶽
あどりふを皆その形の似たれば此名負ひたるなるべし斯書き数ふ
るに人目をもめしてくるし危し御垣の傍に三本の杉とゆ立てり
その下を山川流る略鞍掛石を向ひの山乃峡にあり名を聞にく
ゝ故その狀をいと怪しう文珠の淨土なる獅子の行きこのふ橋の
狀にも似やしたんやりく山を降りて行けば神主ゞ家並み立
てるかよる略松杖の驛路にたどりはきぬ略
本文婦人の書くる體にて記しすべて假名のみの文なり今讀み易くせん
為に漢字を交ふ明阿弥姓を伴名を俊明といふ幕府の道坊なる真淵の
門人
あり

赤城紀行 抄出

高山彦九郎

安永二癸巳年十一月十八日大島甚左衛門吟へ行て大島氏の氏族ゟ書留て、旅宿へ帰り温泉ゟ入

伊香保の神社へ禮服して參詣す町の南へ上り町屋とすぐく東西あり前に寺ゆあり是を則當ゟ伊香保湯泉寺ゟいふ此社い上野國十二社の中にも伊香保の神社赤城神社一の宮の貫前の神社を大三座といひ外を榛名ゟ小九座ゟいふ伊香保の神社今を正一位湯前大明神ゟて四十年計以前此号と云神社寺僧乃守ゟて有るすらよりゟぞるに神号まぞ吟く改ることゟ以のんぞゟ湯前の神号の時も吉田ゟ是を湯前明神別社に祀るべき由仰ゟ下る事大三社の其一を湯前の神にほし奉ゟて愚ゟるゞ故とゞ神拝畢を

其後藥師堂ゆあ回じを南向ゟあり是を別當湯泉山醫王寺ゟいふ神社に社領も区と以ふ中卷伊香保神社の畧并に三神の辨の處見合ゟべし

平澤元愷

登榛名山記天明二年

毛人屢稱榛山之勝。今茲游四萬。便道以四月二十日登。略山在群馬郡。距松枝驛三十餘里。遥秀于百里外。其高可知。路唯阻遲。夙出驛舍。越風斷嶺。晡時乃抵其麓。略已拓山腹。略唯有松杉夾道。百尺千章。于雲霄。是可怡悅。已復前二三里。突兀巨石。嶨立路傍。高出於松杉之上。豈麻中之蓬者石耶。抑松杉欲與石抗耶。横者架雲臥谿。如屋梁。如複道。如尺蠖之將信。愈登愈出。所謂如巨象。如狻猊。如虎踞鳳翔。腐語

飽太牢謂最既探妙義金洞之奇也

未足狀也然我曹已飽太牢亦不易饗耳神祠在巨石之間道樓門壯嚴殆靡廟貌香火之盛遂使山如此俗哉豈人之佞神歟將神之媚人耶若不媚何容佞者求福之不回豈有所不臻哉問之祝司乃曰祀彥友尊或曰美滿持尊今祠稱滿行其義未之詳也傳說滿行事跡陋滋甚近時管轄東叡山云神歟鬼歟將佛陀歟余卒不能辨則不敢拜而下若夫大黑岩葛篋岩龜甲岩佛面岩俯臨岩等土人艷稱姑置略維石巖々奇則奇矣漫遊文草抄出

游船尾山伊香保記天明五年　同

今茲乙巳夏余再游上毛而主澁川村民田子正家略遊船尾山山一名富饒距澁川村半日程與伊香保相連略戲作其文曰如是我聞富饒山有飛泉其高四萬由旬登此觀望世界悉見風景微妙不可思議我從緣起此日同遊與大達尊者大察沙彌優婆塞等四衆俱欲重宣此事而作其記先抵水澤憩觀音堂經行林中遂至瀑布一心除亂咸皆歡喜水聲深妙令人樂聞乃與四衆食飯飲水如是施與甘露醍醐身意益力隨喜無量勇猛精進遂登山頂慇懃賞嘆忽發一意爲四衆故游伊香保山路甚艱伊香保地昨年九月災上蔓延盡爲火宅熱湯涌出如阿鼻獄爾時我等爲病惱故沐浴此湯洗諸欲染患難悉除快樂潔身饑渴頓來周悼熱

問。搏飯殘餘。相集食噉。呵々大笑。走出火宅。稚少遊戲。歡娛
忘著。雖無寶車。隨其所欲。衆意非一。自在絜礙。重經空野。日
没歸家。是時五月。十有三日。尊者爲誰。良珊寺僧。優婆塞何。
田子正等。我則鬼道山人也。漫遊文草抄出

平澤元愷稱五助
寛政三年歿

仁泉亭記

吉田芝溪

在昔連歌師宗祇。浴此温泉。命千明氏亭。曰仁泉。其義取之
温泉能治病也。或曰。伊香保之地。稱村豪者。十有餘戸。各分
規引温泉。若取於泉稱之仁乎。則比屋亦有焉。何獨以亭哉。
曰然然。是以今視古也。伊香保之地。未知其所草創在何代

也。萬葉之咏。既稱伊香保。則其所從来最尚矣。雖文獻不足
徵矣。宅傳口碑。累世緜々。戸不更系。田不更主。僅々數民。居
住湯源之地。千有餘歳。宗祇遊浴之日。以仁泉名此亭者。豈
偶然哉。蓋宗祇親試湯泉有奇効。又親見發源之地及居民。
皆悉爲千明氏之有。而亭名遂以仁者。其形勢自使然也。其
後元龜天正之際。郡屬武田氏。當是之時。千明氏嗣幼而母
老。餘民相謀。告於有司。移村於今地。營業於温泉。傳言。天正
四年。武田侯賜分地於七民。是也。七民乃木暮氏。岸氏。大島
氏。後閑氏。望月氏。島田氏。千明氏也。又分爲十四戸。各規引
温泉。官又定規法。使千明氏世爲規正。又以發源之地爲其

所持也。於乎宗祇以泉徳名此亭。徐澤覃闔村。以地則幽僻
一隅。以耕則瘠土獣害。其民則僅々十四戸。然而千數百歳。
孫々相續。永與温泉相終始者。亦泉徳之餘慶。而吾毛中之
奇村哉。近来村中數罹災。古書舊匾。悉烏有。於是乎。主人托
予以記。予向視宗祇之所書及先年宅址。今猶存于湯源。又
久知閲覧之所由傳。遂取筆應其需爾。享和三年三月

吉田芝渓、名友直、字子正、上毛群馬郡澁川驛人、墓在澁川新田

更衣日記

文政のとしせきのえ申の卯月朔の日上野の國大間とまる古里へ行
くべきよしにつけぞ伊香保の温泉にもまた孫ゑらけを言ひ合せて

多保子

出でたつ六の日を良人の大城へまうし登り給ふやそ従者ふどもへ
ぬやあるとやとそ朝とくそ門出しとの行を略やうく午の刻まぐる頃乘
物いそぎせて立ちいでぬ略三日ばかり大間へ申すぐる頃着きぬ略
きてもいの春を榛名山やりつゝ妻の大御神の御戸開こせ給ふてい人
ぞ伊香保の湯浴みぶそら詣でも世ゑ知しと人とそこのつ
ゑ略同肥あり者る人せ案西やしてそ行べき事やを定め
略十二日伊香保へとそ立ちいで略澁川の宿まる略この澁川
戎立ちて一里ばかり水末しと甘ゑ流そ往来の人千達そ兩
そいはぐ降りあるて俺しきふゆゑく高き山を向ひ千ゐる
と思へぞいつしらその山ゑ後千まあて又ゑ見まあるゑ山

のもひとしく略そなはる程あるく伊香保の里に入るふその入口霧
よりて家居のさまよりは西の側にもあり大なる土蔵あどたちならひ
たるもあり水暮金吉丈をいふが許に宿借るまぬ吉の里に湯宿と
いふが家十二ばかりとうやそが中にもいの金吉丈そうけを豊なる
家あめと聞くいの里に家居の数六十ばかりあるまづこと
に落ちつきうり疾く湯にいりしを見るぞ急ぎ行おもむたくずみ
見るに湯壺三ばかりあるその壺の大と畳ふたくぐらいと
見ゆいの中瀧に落したるぞふたつあるその落つる瀧の音まだ
聞きあかぬぞいと安らかしう覚ゆ昨日より雨のゆえに湯もぬる
かりいと略とくぞ入るに見んとやをら入るに思ひもづらひしうを湯も

屋にこのほを肩にぞ瀧に打おたるおとをおとすぞ略食事とりのへ
出るを見るぞ出べく器を何にもぞ清らの形の町に家ども乃ども
ぬ絵にしう賑にし畫過ぎし涼のきとあるこせんと
を饅頭ひと折敷と茶のまふ出たるを始めを宿屋まらうどにく
るをあるにたるしと聞ゆ部屋こへ女ばかりあるぞと者もく来る
雨間にそこら見渡せば山と山と重なりたるに霧にたるを
見るこそ又六の家乃前栽を見るに梨の花盛りにたるかうへまい
桃の花咲き亂れたるを江戸にを櫻も薮にまぜまる涼ふ
いくばくもなきの卯月十日あまり三日あるぞ綿入るる衣にぞ
早着るぞこのまをあめ伊香保風にうねやうにと涼しくおろ

いまへし侍めぬ「伊香保山出湯乃事を高ふのこゝの寒風
コヽを分る」四方山の景色い屏風ゝくらゐ立て並へたるやうあり明
るゝを出て榛名山へと有るゝ路程二里ばかりといふ
一里登りて見れば平地なりてよりまた一里ばかりといふ平地なる
けく来しと思ひしに向ひの方に大なる水海の見ゆるを籠ヶ
いやこの山乃上を怪みつゝ行きて近くなるまゝに見れば大きなる川
まやとも思はれ人に問へば赤城山の乃ありといふの乃なを
ふくを池を乃とりてなるかいの周七哲行ゝて風出でゝ寒し
かゝる籠かく男ばかりそなものゝ寒きことゝう来なかりしを
めみはゝたゞ見ゆるの」以るの沼と削ゆるゝ見るやこの大御神

沼の古言沼
ゝ見れを
のと池なる
なるのゝ
沼端なり

の底を洗ふゞしいの形に高き山脊ゆ形を富士に似たるの
問へば榛名のふじとゝ云ふあり人も登るゝの「曇ふき鏡」
も見んゝ見ゝ仏清ゝ乃つる深ゝいの池乃周も過ぎぬ坂ゝ
ゝ少し登ゝ宮ゝ有て鳥居ゝ立ゝ茶賣る家二軒ゝ有ゝ
十八町りるといふ此地も見渡す景色いと好しゝ見れば御
葛籠岩と申すなりけるゝ呼ぶゝ風ゝ異なる岩を
近き宮ゝを以ゝ仰ぎて見るきいと遠き方ゝ見れば葛籠
を積ゝなりたんやうに見ゆ此行ゝ中番所ゝ有ゝ杖ゝ笠
を拭ゝ地ゝを行ゝゝ見ゝ石の階ゝ登ゝ御社ゝ廣
前以ゝ見ゝの尊ゝ云ふ乃ゝの山を群馬の郡ゝ屋

まさに本社潜行權現鎮座したまふとの事延喜式の椿名の社とあるそれなりとぞいふの頃より榛名の文字とかきたり事山の略図いふせ君ぞ何ぞ乃詠みなけるなの「松ねの梢ばかりそ榛名やま千代の内のいはかきに筆をそ書いつるため實に某が岳何岩と名づけ姿異なるいはほ時をるを粧知らぬまゝにその名の粧あるを覚えぬかぎめそのゆゑ御姿岩といふを里人幣束岩といふ高きをを何丈とかいふ知らるまゝ空思ふを程の岩ほを半より こゝろみと覚しき處に大きなる都をたゝうとして不思議ともわきまへどその事尋ねたまい何某の院とその申す坊ほを百日の間大行を修し満つる夜の丑の刻に立つと答ふるもいとやゆ

前の倭文女の記あり

いと尊し御前を下りて一町許り行けば鞍掛岩と申す所ありて狀異なるをなかなか少し行きて山門なるを出で御師町六十軒あり登り来たる前なる番所といふ開口より社内に入るなる思へどなれを裏口なる関を知らぬ表乃ちを南に向かつて大鳥居より二王門とやらにて登るなる繪図にかきたるを記すべし或人の記に榛名の山をいと神さびたる指を立てたるんやうに多くの峯はなるあれど東はしかまと見知らぬ狀なりと記したるをさることなり見知らぬこと榛名の山に侍るを本て神の出でをかしたるをもとよりまこと伊香保へその日未過る頃歸る路まことに一所に戯見深

二岳の茶湯
伊香保の湯
と脇屋ふわ

て二つの岳とてあり高き山ふたつなりたるなかの下にもかの湯のわくことはすなわち伊香保の湯元なりまた相馬ヶ岳なるこの以へつ高き山など見えそなれるまうつかの路にて恐ろしき霊なりとて地獄谷といふとこ下宮ぬるぬるぎ湯の沸き出づる霊へ落つといふ身の毛いよだつもろもろ恐ろしとて窺ひ見ぶたぶて急ぎて伊香保へ着きぬ暫休らひて程なくして出でて渋川に宿る 下略 廿二日 江戸へ帰る

この紀を余が祖母が書かれしあり祖母は上野の國山田郡大間々の里正吉田氏の女にて先考磐翁が後母なり この紀はその母君乃田忌なりとぞし故郷へ帰省ありし時にて年五十七後慈光尼と稱し天保八年丁酉五月十六日身まかる年七十おはしき本文も假名書なれども今多く漢字加へたり

伊香保志下巻大尾

伊香保八景沼ち產

こそ名ぬ秋の沼なる出づる温泉にて茶湯の神ちは霊
ぬ秋の月ひとりちまちたひやたるとまれ尋ねてこそ
伊香保とくよかはぐ女の山ちはんぐる蕨びくふるの知を
第のまぐを見て路中三國の山をつくこうぐる出ちに
守門八海鹿ぐの無れる あひだとちら根とも日光東照
神のはく行ふ ふるとゆく音妻川のひるとぐに出ひの心乃
男ぬるぐやとあるる 鼠の赤城山めしぬ川はくこそ
その川ぬる家ゆゆるあれる持の山を中にあるこまるの 紀
姫乳山ぬ樓名ぬ下ぐ 新沼乃うきぬのそ ちとはる沼
わち 樓ちはぐせるとふ空ぐ霊にあるこそ せるや妙覺天の
よ海そこぐれく方をぐぬなるふそめ宮に ぐ名ぬ

編者　秋萍居士

補助　木暮樂山

畫工　長命晏春

筆者　大月栖霞

國文社
剞劂工　佐々木熊二郎
　　木戸小太郎

東京神田淡路町
發兌　國文社

明治十四年四月十二日版權免許
同十五年六月一日發兌

編輯人　大槻　文彦　東京淺艸區今戸町廿一番地
出板人　竹中邦香　同　日本橋區兜町四番地

千明　三郎　福田金七郎
伊香　岸　六左衛門　島田平八郎
保　岸　又太郎　島田次郎三郎
岸　權三郎　島田　權六
賣捌　永井喜八郎　木暮武太夫
所　後閑八十松　木暮金太夫
大島甚左衛門　木暮　八郎